

## ハイチ社会の多重構造と文学の前衛性

立 花 英 裕

ハイチという国は、日本ではあまり話題になることもなく、その歴史も文化もあまり知られていない。せいぜいのところ、得体のしれない「邪教」ヴードゥーの国という程度の認識ではないだろうか。しかし、ハイチは、対人口比において驚くべき数の文学者や芸術家を輩出している。国際的に著名な作家も少なくない。日本ではまだあまり知られていないが、その真価が認められるのは、これからである。

この国は、たかだか二〇〇年程度の歴史をもつにすぎない。その思想と文学は、一八〇四年の独立直後、忽然と現れた。黒人奴隷は、植民地時代には文字を学ぶことが禁じられていた。彼らは、独立後、ようやく手に入れた自由の中で、ものを書き始めたのである。独立以前にも文字を学んだ奴隷は少数ながら存在したし、解放奴隷や自由有色人の存在も無視できないものがある。しかし、国の規模と歴史の短さに比して、その豊かで先鋭的な性格は鮮烈である。たとえば、一九世紀にハイチで刊行された幾つかの書物のタイトルを並べるだけでも、その内容がいかに時代に進んじていたかが見えてくる。独立前に起草され、数年間ながら施行されたトゥサン・ルーベルチュールのサンドミング憲法はおくとしても、ヴァステー男爵の『暴露された植民地システム』（一八一四年）、アンテノル・フィルマン

の『人種の平等について』（一八八五）、アニバル・プライスの『ハイチ共和国による黒人種の復権』（一九〇〇）などは、二〇世紀の黒人運動に影響を及ぼしておかしくない著作である。

二〇世紀に入ると、ハイチの思想と文学は深度を増し、民俗学などヨーロッパの人文・社会科学から多大な影響を受けつつ変貌する。その代表的な作品が、ジャック・ルーマンの『朝露の統治者』や、ジャック・ステファヌ・アレクシスの『ソレイユ將軍』、『奏でる樹木』である。ルーマンの作品は必ずしも前衛的とはいえないかもしれないが、その象徴性は、彼が適用しようとした社会主義レアリズムを超えた可能性を秘めているし、ジャック・ステファヌ・アレクシスの小説世界は、ラテン・アメリカ文学の『魔術的レアリズム』に通じるものを既にして内包していた。次の世代のエミール・オリヴィエやアントニー・フェルプス、あるいは、フランケティエンヌやジャン・クロード・フィニョレの時代になると層も厚くなり、幅を広げながら、先駆的な作家を送りだすようになる。こうしたハイチ文学の性格は孤立したものではなく、ラテン・アメリカ文学の展開と明らかに呼応しているし、マルチニクやグアドループのフランス語圏文学との相互交渉が見てとれる。更に北アメリカも含めた広大なアメリカ地域との共通性をもちながらも、この国の時間に根差した独自性に貫かれている。本論では、そうしたハイチ文学の独自性、その前衛的な性格がどのような歴史的、そしてとりわけ社会的・文化的背景をもっているのかを考察したい。

## 1 「文明」と「野蛮」の狭間で

ハイチは分裂したイメージに彩られている。たいていは、「世界で最初の黒人共和国」として紹介されるが、すぐそのあとに「世界でもっとも貧しい国」という言葉も続く。グードゥーの国とも言われる。これらの語が、バラバラな、謎めいた影のように舞っている。ハイチは、「世界で最初の黒人共和国」という点で、世界史の中でもっとも

先駆的な国であると同時に、今日では著しい「後進性」を強いられているのである。ハイチ文学の前衛性は、「先駆性」と「後進性」が共存しているというハイチ社会の不均衡な性格に由来すると仮定することができよう。たしかに、近代文学の成立を振り返ってみると、社会の「後進性」が、かえって重要な契機となっていることが少なくない。我々に親しいところでは、一九世紀ロシア文学がある。西ヨーロッパ近代思想に心酔した知識階層と伝統的なロシア農民社会との乖離が意識されることからロシア文学は出発したわけである。ラテン・アメリカでは、ルーベン・ダリオに代表されるモデルニスモの運動があった。スペイン現代文学も、一八九八年の米西戦争の敗北によってスペインの衰退に衝撃を受けた知識階層、いわゆる九八年の世代によって切り拓かれた。いうまでもなく、日本近代文学も二葉亭四迷の『浮雲』に見られるように、近代化による社会構造の流動化の中で「近代」と「伝統」分裂を主題にしてきた。

しかし、ハイチが、これら、いわば「遅れてやってきた」国民国家群と異なるのは、近代国家が「文明」と「野蛮」という新たな価値観の成立を通して形成されたという歴史的事情にかかわっている。近代国家は定義上、「野蛮」の否定の上に成立している。ところが、「黒人国」であるが故に、ハイチは独立の当初から、「野蛮」という歪められた表象を外部から押しつけられた。自己の存在を国際社会に認知させ、近代国家としてのアイデンティティを獲得するには、黒人でも「文明人」でありうることを証明しなければならなかった。

いま一度、ハイチが独立した一八〇四年に立ち戻って、周辺地域を見回してみよう。すると、誰もが知っているように、南北両大陸にはいまだ広大な植民地がどこまでも割拠していたのであり、唯一アメリカ合衆国だけが二〇年足らず前から存在していたにすぎないことが分かる。当時の合衆国は、今日よりもはるかに領土が小さく、その比重

は、地政学的にも経済的にも、今日とは比べ物にならないほど小規模だった。それに比して、ハイチの前身サントマングは、面積こそわずか二万七千平方キロメートル程度だったが、その輸出額はアメリカ合衆国のそれを凌駕していた。西インド諸島の全英領植民地をもはるかに越えていた。「世界で最初の黒人共和国」とは、この「カリブ海の真珠」と呼ばれた植民地が十四年間にわたる独立戦争によって灰塵に帰したあとに出現した国だった。当時ヨーロッパ最強と見なされていたナポレオン軍は、マラリアなどの風土病に消耗し、勇猛な黒人兵たちを前にたじろいだ。もとの隷属状態にもどるよりは死を望んだ黒人たちに対してなすすべはなかった。フランス革命は、カリブ海の小島に、革命の理念を受け継いだ国を生んでしまったのである。この事態は、サントマングの黒人奴隷にとってさえ、その意義を十分に測りがたいものだった。反乱が明確に独立志向に傾いたのは一八〇二年以降だったが、そのことから歴史が当事者にとっても思いがけない方向に進んだことを明かしている。

ハイチの独立は、単に新しい国が誕生したというだけではなかったことを意味する。歴史が近代史の曙において一瞬揺いだのである。一八世紀末から一九世紀初頭のヨーロッパ人の目には、黒人は白人に比べて知能が劣り、いかなる文化も生み出しえない「野蛮人」だった。そのような黒人が国家を樹立しうるとはとても考えられなかった。当時最先端の政治理念を看板として掲げた国家ハイチ共和国は、一九世紀を迎えたばかりの人々の世界観や価値観に真っ向から衝突する不遜極まりない国家だったのである。

ハイチは、奴隷制度をいまだ生産体制の根幹に置いていた周辺地域の秩序にとっても好ましい存在ではなかった。事実、サントマングの黒人奴隷反乱に呼応するかのようには、マルチニク島やグアドループ島でも奴隷が入植者たちを脅かしている。一八〇二年には、グアドループで、有色人将校ルイ・デルグレが三〇〇名の兵と共に奴隷制復活に抗議して叛旗を翻し、最後は要塞の中で自爆している。アメリカ合衆国もその例外ではなかった。合衆国史上最大と

言われている黒人反乱が、一八〇〇年夏に発生している。一〇〇〇名の奴隷がリッチモンド付近で首謀者ガブリエルと共に武器をもって立ち上がったと言われる。ジャマイカでは恒常的に逃亡奴隷の叛乱に悩まされていた。一八九一年の反乱以来自由になった黒人奴隷が大きい顔をして統治している島が存在することが、いかに目障りであったかは想像に難くない。ハイチが世界史の中で正当な地位を与えられていないとすれば、このような成立を取り巻く歴史的状况に第一の原因が、それも今日では隠蔽され、他の理由にすり替えられてしまった原因があるためである。時あたかも、ヘーゲルが歴史の展開を自由な精神の形成過程としてとらえる『精神現象学』を憑れたように書き始めた時期だった。歴史の主体と自己を意識しはじめた西欧にとって、ハイチは近代史から抹殺すべき国だったのである。

実際、ハイチを歴史上の小さな挿話としてではなく、史上初めて奴隷が解放された国として認知するならば、近代史は少なからず書き換えなければならないだろう。たとえば、南北戦争時のリンカーンによる奴隷解放宣言は、あたかも奴隷解放史上最大の金字塔であるかのように語られる。たしかに奴隷制度廃止はすばらしいが、他方で、アメリカ合衆国は一八六一年まで頑としてハイチを承認しなかったし、またハイチ革命の波及を恐れて、ヴィドゥーのおどろおどろしいイメージを世界に喧伝してきた。世界史の一般的なテキストの中で、ハイチは「野蛮な国」として閉じこめられ、黒人は自らの手で奴隷制度を打ち破ったことはなく、白人たちの善意によってのみ解放されたかのように語られてきたのである。奴隷解放の功労者はアメリカ合衆国であればリンカーンだろうし、フランスであればヴィクトル・シエルシエールである。しかし、世界で初めて名目的にも実質的にも奴隷制度を廃絶したのは、ハイチの黒人奴隷たちであり、その指導者がトゥサン・ルーベルチュールであったことは大きく書き記しておく必要があるだろう。

## 2 大西洋システムからの脱落

ハイチが植民地としての軛から脱したことは、ウォーラステインのいうところの大西洋システムからの脱落をも意味している。カリブ海域は、たとえばアフリカなどよりも早く資本主義システムに組み入れられていたが、独立後、ハイチはヨーロッパや周辺地域との経済交流の輪から外れてしまったため、独力で近代社会を政治的にも経済的にも建設しなければならなかった。

初代の大統領であり、まもなく皇帝になるデサリーヌは、社会主義といってもよい政策を施行した。プランテーションを国営化し、旧地主に返還することを拒んだのである。しかし、植民地時代から土地を所有していた有色人（ムラート）や解放奴隷の反発を招き、次代のアンリ・クリストフやボワイエの時代になると、軍人に土地を分かち与えざるをえなくなる。こうして、ハイチは奴隷制こそ廃止されたものの、基本的にプランテーションを基盤とした経済体制から抜け出せないままに、主にコーヒーの輸出によって近代化の道を探ることになる。

他方、一般の黒人たちは内陸部に引きこもり、前近代的な生活に後退していった。プランテーションでの半強制的な労働を好まず、逃亡して小規模な農業を営むことの方を好んだのである。彼らは、資本主義経済回路から脱落した自閉的な世界を作っていく。一九世紀前半、ハイチ社会の原型が形成される時代に大きな役割を果たしたシャルル・ボワイエ政権は、独立承認の引き換えとして多額の賠償金をフランスに支払うために「農民法」を制定し、プランテーションに働く者が許可なしに他所に移住することを禁じ、厳罰をもって対処したが、かえって一般農民の離反を招き、社会構造の亀裂を決定的なものにしてしまう。ヴァードゥーを信仰するハイチ農民の原型は、そのような社会の分裂の中で形成されるのである。

ハイチは、宗主国の助けをまったく借りずに、いわば内発的に発展していかなければならなかったのだが、その過程で生じたのが、近代国家の建設を模索するプランテーション経済と前近代的な農村社会への分裂だったのである。サンドマング時代の奴隷たちが、ヴードゥーを信仰する「ハイチ農民」に変貌していく過程において忘れてはならないのは、サンドマング植民地が、他の地域には通常見られる伝統社会を基盤としていなかったことである。一般に、社会は、近代的なものであると、前近代的なものであると、日常生活と生産活動が密接に融合した組織として構成されている。たとえば、穀物の刈り入れといった生産活動の後には収穫を祝う祭が催されるのであり、そのような生産活動と象徴交換が一体となった生活様式が確立している。ところが、ハイチでは、そのような伝統社会が存在しないところに近代理念に基づいた社会を具現しなければならなかった。同じ理念を看板に掲げたフランス革命と比べてもよいかもしれない。フランス革命は伝統社会組織を破壊し、非理性的な迷信や特権階級を否定し、まったく新しい社会の建設がめざしたが、革命後も、伝統社会が破壊しつくされたわけではなかったのである。ところが、革命後のハイチの場合、外部から運び込まれた雑多な黒人奴隷が自己解放して実現した根なし草の国であり、そもそも、ナシヨナリズムの条件ともいえる起源の神話を容易にする伝統社会そのものが存在していなかった。ハイチ農民の歴史からの退出は、奴隷時代にはもち得なかった伝統社会を再興し、象徴交換を回復した共同体を模索する動きだったと捉え直すことができる。

サンドマングの黒人叛乱は、カイマンの森におけるヴードゥーの儀式によって始まったが、そのことのもつ意味は極めて大きい。周知のように、プランテーションの黒人は、部族も異なれば文化・宗教も異なるアフリカ人たちの寄せ集め集団であり、肌の色が同じとはいえず、集団意識をもちにくかった。一七九一年八月十四日にカイマンの森で儀式を司り、叛乱の首領となったブックマンは、ヴードゥーを中心に据えることによって、黒人たちの共同体としての

集団意識をもたせることに成功した。本来のヴードゥーは西アフリカの特定部族の宗教だったが、それをアフリカの緒宗教の混交体に変革しえたときはじめて、サンドマンクの黒人たちは、死をも恐れずに一丸となって闘うアイデンティティの神話をえたのである。

プランテーションは、基本的に一つの作物しか栽培せず、周囲の環境から孤立し、ヨーロッパ宗主国を中心とした外部世界に依存した特異な生産組織体だった。外部から運び込んだ黒人奴隷を使役し、砂糖黍や綿花、コーヒーなど、もともとカリブ海域の産物ではないものを栽培し加工し製品にする閉鎖的な空間だった。一般的には、人間の経済・生産活動は、それだけが孤立して営まれるものではなく、効率的な集団労働に適した伝統的共同体組織を基盤としている。日常生活と労働が分かちがたく入り組み、経済分業が社会組織に反映され、象徴交換体系によって宇宙の中でも意味を与えられている。

ところが、プランテーション内では、奴隷は共同意識を抱くことが阻まれていた。奴隷は、個別に主人によって所有されている財産だった。主人の意志一つでどうにでもなる存在なのである。奴隷は処罰を一人で受けるしかなかった。仲間が共同で、彼を守ことは困難だった。ようするに、自分の命を救うだけで精一杯であり、自分一人で生きのびることに専心しなければならなかったのである。エドゥアール・グリッサンは、このような黒人の生き残りの心理を「迂回する」「回り道をする」性向と呼んでいる。黒人奴隷は、いつでもまっすぐ目的に進むのではなく、主人の目をかすめるために「回り道」をし、「脇道」にそれることを余儀なくされるというのである。このような行動パターンは、ロビンソン・クルーソーに比較すると分かりやすいかもしれない。ロビンソン・クルーソーは、カリブ海の孤島に漂着するがあくまで自由であり、孤立無援の状態で生き延びるべく思慮と規律によって新たな環境に対応し、



将来に備えて蓄積していく。しかし、奴隷は、隷属状態に置かれていて、自らの意志で生活を築くこともできないければ、計画的に蓄積をして将来に備えることもできない抑圧的な空間に閉じ込められていた。もし、偶然に食べ物が見つかったら、保存するよりは、その場で食べて体の中にいれてしまった方がいいのである。このように将来の目標をもち得ないままに盗んで食べたり、あるいは誤魔化して遊んだりする態度を、グリッサンは「迂回の問題」と呼ぶ。それが共同体意識からほど遠いことは明白である。奴隷制プランテーションという生産組織では、社会を建設していくための共同意識が育ちにくいのである。そのような経済体制から出発したハイチは、その非人間的な空間を変革して、人間が生きるにふさわしい近代社会を築かなければならなかったのである。

もちろん、黒人奴隷たちは、すでに植民地サンドマンングの時代から共同体意識を育もうと努力していた。彼らも、家畜のように生れ死ぬのではなく、共同体の象徴空間内で生まれ、死んだ後に葬られる場所をもつことを願ってやまなかった。共同体とは、現実世界だけではなく、象徴的・想像的な価値体系によっても組織された一世界である。ヴードゥー教は、サンドマンングの奴隷たちが、そのような切実な必要性から作り出した象徴交換体系だった。ヴードゥー教というと、呪いやゾンビなどで知られており、悪魔的な宗教というイメージが強くあるが、プランテーション内の黒人奴隷にとっては、共同体形成に適していない場所でなんとか共同意識を創出するための自己救済の方途だったのである。

ハイチ社会は、きわめて多重的な構造をもっている。一方では、フランス革命の理念を額面通りに実現しようとしたエリート階級がいたが、他方では、通常の意味での伝統的共同体とは異なる社会構造に生きる農民がいる。この分裂した社会組織は、都市と農村との対立となって現れる。一九世紀のハイチは、都市が、教育を受けた黒人中産階級

や混血ムラート上流階級が暮らす空間となり、農村が、圧倒的多数の黒人奴隷が零細な農民に変貌して住みつく閉鎖空間になる過程だった。農村は近代国家の基礎としての伝統的共同体として機能せず、むしろ、国家組織の外にある別の、もう一つの世界 (Barthelemy, 1989) になったのである。農民は、都市の住民には想像もつかないような世界に生き、国民意識を喪失していった。

世界史の最先端に位置していたはずの新興国家ハイチは、こうして二〇世紀のはじめに、国民統合意識の形成途中で内部分裂を深めたのである。

### 3 アメリカによる占領とジャン・プライス＝マルス

ハイチの現代文学を理解するには、以上述べたように、ハイチが世界史から抹殺された国であること、そしてまた、近代国家の理念を掲げながら、農村社会が「近代」から脱落した「闇の社会」になったことを踏まえないならぬ。

ハイチ現代文学誕生の直接的な切っ掛けは、一九一五年にアメリカ海兵隊がハイチの政治的混乱を利用して突然上陸したことだった。その後、アメリカは一九年間にわたって占領を続ける。この予期しない事態に、ハイチ知識人の特権意識は根底から揺るがされた。彼らが見下していた「アフリカの」農民は、シャルルマーニュ・ペラルトの指導の下に、強制的な土地の買収を進める合衆国に武器をもって立ち上がったのに対し、知識人たちはごく一部をのぞいて抗戦しなかったのである。彼らは二重の意味で恥辱と挫折感を味わったのである。

当時、ハイチの有産階級は、黒人と有色人との間で果てしない抗争を続けていた。この抗争は、独立戦争の経緯を背景にしており、当論では詳述する余裕がなかったが、他の諸国において見られるような、伝統的な価値を保持しよ

うとする封建的階級と、自らは有産階級に属しながらも、民衆のレベルからの近代化を押し進めようとする近代主義者たちとの間の抗争とは様相の異なるものであった。ハイチでは、ムラートの多くは独立以前から大土地を所有しており、奴隷制度に密着した人種観を捨て去ることなく、白人志向を抱き、「自由主義者」と称しながらも、ハイチの社会的矛盾を維持しながら、外国資本と結びつこうしていたのに対して、黒人の有産階級は、黒人一般大衆、すなわち農民への教育と経済援助を説きつつも、外国、とりわけフランス崇拜から脱却できずに、農民文化から背を向けた西欧模倣主義に陥っていた。つまり、根強い人種差別意識をもっていたムラート階級も、ハイチの国是である人種間の平等を説く黒人有産階級も、結局は共に黒人一般大衆から遊離したまま、国際社会に受け入れられることを望みながら、権力闘争に明け暮れていたのである。黒人有産階級が農民を擁護しながらも、その文化は蔑視し、「野蠻」視していたことを端的に示すのは、西欧に対して、黒人が白人と同じように文明を創造できることを証明しようとし、フランス人とまったくようにフランス語を話し、フランス文学史にそのまま連なるような文学作品を書くことに執着していたことである。彼らは、「野蠻な国」という烙印をぬぐい去り、ハイチが西欧諸国と伍していける文明国であることを証明することを使命としていたのである。不平等条約の改正を望んだ明治の鹿鳴館時代を思わせないでもない。

ムラートと黒人との社会的・政治的対立は、アメリカ合衆国による占領を機として新たな展開を見せる。ハイチの知識階層は西欧模倣主義に疑念を抱くようになり、農村社会を、そしてまたヴードゥーを再発見するのである。指導的な役割を果たしたのは、ジャン・プライス＝マルス（一八七六―一九六九）だった。北部の富裕な家庭に生まれた彼は、留学生としてパリに渡り、医学を勉強するが、まもなく社会学や人類学に興味を抱き、医学を放棄して専念するようになる。そうして身につけた彼の素養が、『おじさんはかく語りき』という、ニーチェを思わせる、奇妙とい

えば奇妙なタイトルを冠した講演集に結実することになる。ジャン・プライス＝マルスは職業的な文筆家ではない。この時代、ハイチのエリートはあらゆる分野で活躍することを期待されていた。彼の場合も同様で、留学後は、一時帰国をまじえながら外交官として米国やフランスに滞在している。しかし、アメリカ占領下の一九一八年に帰国すると、ペティオン高校の歴史・地理学の教授に就任し、エリート階級に自己反省を促す一連の講演を全国各地で行い、それをまとめた『おじさんはかく語りき』を一九二八年に出版するのである。この講演集の中で、彼は、ハイチのアイデンティティは、それまで「野蛮」とされてきた農村社会の中にこそ求めるべきであり、ハイチ文化の根源はアフリカ文化にあると説く。農村社会をハイチの恥部として外国の目からできるだけ隠そうしてきた知識階級やブルジョア階級からプライス＝マルスは激しい反発を受けるが、他方で、若い知識人を中心に強い支持も獲得する。

『おじさんはかく語りき』は一種の文明論でもある。その核心は、グードゥーは「宗教」であり (Price-Mars, 1998, pp31-37) したがって、「文明」と対立するものではないというものだった。当時、グードゥーは宗教ではなく野蛮な迷信であり、撲滅すべきものだと考えられていた。グードゥーの司祭ウンガンやマンボは、しばしば迫害され、投獄されていた。グードゥーが迷信ではなく、キリスト教やイスラム教と同じような宗教であるとすることは、きわめて大胆な主張だったのである。また、文明という概念も、まだ今日のような文明観が確立していなかった当時の事情を考慮する必要がある。普遍主義的な文明概念が一般に広まるのは、フランスでは第三共和政以降であり、第二帝政までは、キリスト教的な文明概念が広く受け入れられており、文明国とは宗教をもった国と見なされていたのである。そのような文脈で考えれば、グードゥーが宗教であることを証明することは、それだけでハイチが文明国であると証明することにつながるわけで、グードゥーがなんら恥ずべき迷信でも魔術でもなく、ハイチ国民の生活の知恵であり、世界観であり、そのアフリカの魂をあかすものだと思えられるのである (プライス＝マルスにおいては、

「文化」という概念はあまり用いられていない。

ジャン・プライス＝マルスは、このように人類学的な視点からヴードゥーを再評価し、知識階層に西欧模倣主義からの脱却を訴えたのだが、それが広範なハイチ回帰主義とでもいうべき運動を引き起こす。まもなく、彼は、ポルト・フランスに民族学研究所を設立し、ジャック・ルーマンと共に雑誌『ルヴュ・アンディジェンヌ』を創刊し、アンディジェンヌ（土着主義）の運動を推進することになる。その中から生まれたのが、本論の冒頭で挙げたジャック・ルーマンの『朝露の統治者』であり、ジャック＝ステファヌ・アレクシスの『ソレイユ將軍』、『奏でる樹木』である。新しい世代の作家たちは、ハイチ農民の生活を間近に観察し、ヴードゥーを初めとする習俗や習慣をエグゾティスムから解放しつつ、そこに、ハイチの共同体の可能性を探ったのである。その後、ハイチ文学は、デュヴァリエ政権の弾圧を受ける中で厳しい展開を示すことになるが、それでも、ジャン・プライス＝マルス以来の問い、「われわれはいつたい誰なのか」という問いは一貫して流れている。最近では、作家たちの眼差しもさらに深まり、沈着な態度で人間存在の根源をヴードゥーのうちに探り出そうとしているかのようだ。そのことによって、キリスト教文化、そしてそこから出てきたヨーロッパ現代文化に極めて近いようでありながら、異なる文化、それも決定的に現代的な文化を模索しつつあるのである。

ハイチは一九世紀を通じて、そして今日においてさえ、奴隷が築いた「野蛮な国」、文明の圏外にある国として、その存在さえも否定されてきた。近代を根底から支えてきた文明論は、文明VS未開という二項対立を基盤としており、未開＝黒人という人種差別を内包している。「文明」が「文明」として自己肯定するには、未開の地をどこかに設定しなければならないのである。ハイチの独立は、そのようなイデオロギーにとって、未開人の独立国という論理

矛盾をもった、近代史のディスコースから逸脱するしかない事件だった。ハイチの独立戦争が近代史から抹殺されたのは、あるいはそこまで言うのは行き過ぎなら、近代史の挿話的な事件としてしか捉えられてこなかったのは、その存在自体が近代史の根底を支えている価値観を揺るがすものだったからである。ハイチが近代世界の中で、また、現代世界の中で正当な地位を獲得するには、そのような「文明観」、「先進国」、「後進国」を問わず共有されてきた「文明観」を書き換えなければならない。その場合、西欧の普遍的文明観を批判するだけでは十分ではないだろう。西欧の後に続いて「近代国家」を築いてきた国々も、ハイチ独立戦争を通じて形成された文明概念の内包を受け入れてきたからである。ハイチ文学の根底には、文明論や近代国家論への挑戦が潜在しているのである。

#### 参考文献

- 石塚道子（編）1991『カリブ海世界』世界思想社
- 佐藤文則1999『ハイチ 目覚めたカリブの黒人共和国』凱風社
- C・L・R・ジェームズ1991『ブラック・シャコパン トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』大村書店
- ゾラ・ニール・ハーストン1999『ウードゥーの神々ジャマイカ、ハイチ紀行』新宿書房
- 浜忠男1998『ハイチ革命とフランス革命』北海道大学 国書刊行会
- フランケチェンヌ他2003『月光浴―現代ハイチ短篇集』国書刊行会
- エリック・ウィリアムズ1978『コロンブスからカストロまで I & II―カリブ海域史、1492―1969』岩波現代選書、岩波書店
- Antoine, Régis. 1992. *La Littérature franco-antillaise* / Haïti, Guadeloupe et Martinique. Karthala.
- Barthélémy, Gérard. 1989. *Le Pays en dehors/essai sur l'univers rural haïtien*. CIDIHCA
- Césaire, Aimé. 1981. *Toussaint Louverture/ La Révolution française et le problème colonial*. Présence Africaine.
- Césaire, Aimé. 1970. *La Tragédie du roi Christophe*. Présence Africaine.
- Chemla, Yves. 2003. *La Question de l'autre dans le roman haïtien*. IBIS, Rouge Editions

- Corzani, Jack ;Marie-Lyne Piccione;Léon-François Hoffmann. 1998. *Littératures francophones-- II. Les Amériques*, Haiti, Antilles-Guyane, Québec, Ed. Belin.
- Fick, Carolyn E. 1990. *The Marking of Haiti / The Saint Dominique Revolution from Below*, Tennessee.
- Glissant, Edouard.1981. *Le Discours antillais*, Seuil.
- Hurbon, Laënnec. 1987. *Comprendre Haïti / essai sur l'Etat, la nation, la culture*, Karthala.
- Price-Mars, Jean. 1998. *Ainsi parla l'oncle*. Imprimeur II.
- Marty, Anne. 2000. *Haïti en littérature / Préface de Régis Antoine*, Maisonneuve & et Larose.
- Shelton, Marie-Denise. 1993. *Image de la Société dans le roman haïtien*, L'Harmattan.

